

【書評】

ラナ・ミッター著・吉澤誠一郎訳

『五四運動の残響：20世紀中国と近代世界』（岩波書店、2012年）

水羽 信男

はじめに

本書は Rana Mitter 氏の *A bitter revolution: China's struggle with the modern world* (Oxford University Press, 2005) の翻訳である。ミッター氏はすでに *The Manchurian myth: nationalism, resistance and collaboration in modern China* (University of California Press, 2000) などでも知られた気鋭の研究者で¹、最新作 *Forgotten ally: China's World War II, 1937-1945* (Mariner Books, 2014) も着目される。訳者の吉澤誠一郎氏は、『歴史からみる中国』（放送大学教育振興会、2013年）や「清末中国における男性性の構築と日本」（『中国：社会と文化』29号、2014年）などで学界に新たな観点を提示し続けている。1989年の中国の民主化運動とその弾圧を20歳前後で経験した著者と訳者の同世代の二人は、本書の公刊で学界に裨益した。

本書の書評としては、藤岡邦子氏（『広島東洋史学報』第18号、2013年）、大沼正博氏（『中国研究月報』第67巻第7号、2013年）、そして広島大総合科学部で評者が担当する「東アジア地域史演習」参加者（『アジア社会文化研究』第16号、2015年）によるものが公刊されている。その他にも訳者による「五四運動から読み解く現代中国：ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに」（『思想』第1061号、2012年）もある。したがって拙稿では、評者の関心に基づき、本書から何を学び今後の研究でどのように深めてゆくのか、という点に限定して論を進めたい。

I 本書の優点：「近代性」への着目と叙述の巧みさ

本書の記述の根底にある基本的な問題視角のひとつは、中国における「特別な性格の」近代性（modernity）のありようを20世紀の世界史のなかで考えるという点である。ここでいう近代性とは、「世界各地での類似性の拡大の傾向が多様化を凌駕してゆく」近代における「類似性」、すなわちアジアでは19世紀半ば以降顕在化してくる「新しい」社会状況を意味するものといえよう²。

近代性が前近代との対比において進歩的な側面（「人権」意識の確立など）を持つことは当然だが、他方で負の側面も有していた。代田智明氏によれば、近代性とは社会を「つねに差異化し（排除して差別する地域や人びとを設け）ながら、排除を望まぬなら同化をするように迫」り、20世紀の大量殺戮に関係していることも否定できない、ということになる³。

著者もまたこうした視座を共有しており、たとえば文化大革命をドイツのヒトラーによる「民族浄化」とならべたうえで、近代性のひとつの現われと見なし、その根拠として次のように指摘する。

〔近代性のあらわれの一つである〕ロマン主義における個人的要素をみれば、なぜ毛沢東を皇帝に比するというありがちな見方が完全には成り立たないかがわかる。これは、まぎれもなく

個人への崇拝なのであって、前近代中国で皇帝への崇拝があったような儀礼の伝統に由来しているのではない。毛沢東崇拝の創出にとって、近代的自我や近代マス＝メディア技術は不可欠だった（本書 231・232 頁、以下、括弧内の数字は本書の頁数、[] 内は評者の注記である）。

文化大革命については、近年、「モダニティ」の負の側面を示すものとみる代田氏と、「アジア的専制主義」の現われとみなす石井知章氏との間で議論が行われている⁴。この論争に評者が直接関与する準備は今ないが、本書に学べば、文化大革命における近代性の意味を検討することが、現代中国最大の悲劇の理解に役立つということになるだろう。

いずれにしても著者は近代性という分析視角を持つことで、共産党と国民党との共通面を確認し、1949 年で歴史を断絶しない見方を可能とした。著者によれば、近現代の政治史の分析では「自由民主主義と共産主義」とは相容れないものと理解されるが、両者ともに「合理性と世俗主義という啓蒙主義由来の同じものから生まれ」たのであり、中国が「意識的に啓蒙主義を拒絶し、非合理性・根源的な思考を擁護し、より明示的に疑似宗教的でスピリチュアルな主題を求めた」ことはないのである（191）。さらに本書は「新政」を含む清末の改革と、新文化運動とを断続面だけでなく、連続面でとらえ（21）、20 世紀中国を世界史の展開のなかで位置づけた。こうして本書は新文化運動期に中国で登場した民主的な中国への期待が、その後の歴史のなかで未完の課題として繰り返し問われてゆく過程を、説得的に描き出してゆく。

また叙述に際して著者は、中国研究を専門とはしない欧米人読者のために、思想史的なテーマに焦点を当て、多くの知識人を登場させながら、当時の普通の庶民たちの暮らしからも歴史を描くように努めている。こうした叙述のスタイルは、広島大学総合科学部で本書と一緒に講読した 20 歳前後の学生にとって、印象深いものだったようである。彼・彼女らにとって、日本のマスメディアを通じて触れる中国は、ともすれば危険や脅威が強調される奇妙で不思議な国である。しかしその中国に生きる人々も我々と同じように、恋愛にあこがれ職場関係に悩み、そして将来を夢見る普通の人間である、ということを見えてきたことは、歴史事象の詳細な知識を得る以上に、重要なことだったようである。

当然、通史と専門研究書や研究論文とを同一に論じることはできない。だが、日本には本書のような“読ませる”通史が少ないことも否定できず、読者にありのままの中国を興味深く理解してもらえる工夫を研究者の側が今以上に鍛錬する必要がある。自戒を込めて、この点を指摘しておくことも意味はあるだろう。ちなみに地方新聞の記事を丹念におい、当時の版画なども活用しながら、中国の基層社会の実態から、1949 年革命の意味を問い直した笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』（講談社選書メチエ、2011 年）は、執筆者の「筆力」を感じさせる数少ない例外の一つである。

また著者が使用した茅盾主編『中国的一日』（生活書店、1936 年）、張辛欣、桑擘『北京人：一百個普通人的自述』（上海文芸出版社、1986 年）、樊建川『一個人的抗戰：從一個人的藏品看一場全民族的戰爭』（中国对外翻訳出版公司、2000 年）等々は、各時代の雑誌の投書欄や文学作品の叙述とならび、民衆の側から中国の近現代史を考えるうえで重要な史料であることを、改めて確認しておく必要があると筆者は考えている。

II 本書に学ぶ今後の課題：中国の民主主義をめぐって

本書の特徴のひとつは、中国（大陸）の民主化の可能性を追求し、対外的な危機が基本的には解決された今日こそ、民主化の可能性が高まった時期であると強調している点である。さらに著者は、今日の中国の知識人の国際情勢をめぐる議論に、過度に危機感を煽る傾向があると指摘しており、極めて論争的な側面をもっている。こうした状況認識にたち、著者は台湾の民主化の経験を根拠に、中国が民主的改革を実施することは可能だと考え、そのための知的な武器庫として、新文化運動以後の中国の新たな思想史の展開に着目したのであった。

とはいえ著者は中国の民主化の可能性について次のように指摘している。

民主が到来しても、必ずしも自由主義的な考え方が擡頭するとは限らないだろう。中国が人種の本質という考え方を持っているならば、国内で選挙を行うという意味で民主的になるのは容易かもしれないが、政治的な多様性を許しにくい一枚岩になるかもしれない（283）。

著者にとって多元的で自由主義的な価値の実現が重要なのであり、少数民族や女性の権利擁護・地位向上は、決して副次的には扱えない問題であった。それゆえ 1989 年の民主化運動が、「都市の男性漢族」が重大だと考えることを最優先し、「ジェンダーやエスニシティ」の問題などを「不要不急のもの」としたことを厳しく批判している（282）。著者は弱者／マイノリティによりそわない強者／マジョリティによる民主化へ批判的なまなざしを向け続ける。こうした問題点は今日の中国においても見いだされ、ここに生活者としての著者の信念が示されている。

著者の指摘は多数による支配を意味する民主主義が本来的に持つ危険性を意識したものであり、中国の民主化を構想するうえで、極めて示唆的である。しかし他方で「個の尊厳」の軽視を中国の宿痾としかねない点には、フェアバンクなどによって定式化された Sino-liberalism 論の影響をみることも可能であろう。評者は Sino-liberalism 論を批判するために、羅隆基ら中国にも存在した「個の尊厳」を重視する知識人の活動に着目してきたが⁵、より根本的な問題は中国が陥りかねない民主化の罍の回避の方策を追求することである。この点について著者の考えは明示されていないが、一つの重要なテーマは中国における立憲主義とそれに基づく法制度の整備だと評者は考えている。

また著者は新文化運動以来の中国の思想界において、儒教に対する徹底的な批判だけが存在したのではなく、中国の知識人のなかには「倫理と相互扶助について儒教は本来こだわっていて、社会の悪をただすのに使えるかもしれない」と考えたものも少なくなかったと示唆している（240-241）。この点は近年中国で流行している「儒教憲政」論の検討などととも、本書に学びつつ検討すべき今後の課題であろう。

おわりに

A bitter revolution（苦しみの革命）という原題は、日本人の読者に分かり難いとの判断から、五四の残響との訳書名になったとのことであるが、残響という語に訳者のセンスの良さを感じている。

ただ、なぜ著者が魯迅のこの言葉を書名にしたのかは、本書のエピグラフとしてホルヴァートの「神なき青春」の一節が置かれている意味とともに、検討に値するものだと考えている⁶。

魯迅の言葉は1930年の「左翼作家連盟についての意見」からのもので、革命とは破壊だけでなく建設を担う決意と構想力を持たなければならず、そうでないと「汚れや血をふくまざるをえない」革命の現実をみて「失望」し、革命を標榜する者の中から「反動の側へまわるものさえ出る」危険性に警鐘を鳴らしたものであった⁷。他方、ホルヴァートからの引用は、極めて困難な環境ゆえに「信仰」（ここでは正義・公正・良心や真実の探求への信頼）⁸を失った子供たちを描く場面である。

とすれば「20世紀において革命は苦しみだった。21世紀には、その苦しみを軽くするような選択をすることができる」（312）という本書の最後の一節は、20世紀中国が直面せざるをえなかった苛烈な国際環境と国内情勢のもとで生きる人々の「苦しみ」への共感と、国内外の環境・情勢の変化にともなう、中国の民主化への著者の大きな希望を示しているといえよう。

ところで訳者は前掲「五四運動から読み解く現代中国」で、著者が近代日本における疑似事宗教的要素を強調することに対して違和感を示している（156頁）。しかし、評者には「パワースポット」がメディアを賑わし、周期的にスピリチュアルブームが訪れる今日の日本の精神状況をどうとらえるべきか、訳者のように明確な判断を下せずにいる。少なくとも戦前の日本のエリートの多くが狂信的な国家神道の信者ではなかったにもかかわらず、なぜ非理性的な疑似宗教的な政治に抵抗できなかったのかについては、今後とも分析を加える必要があるだろう。知識人を含む国民をあげての過剰な愛国心の危険性を指摘する著者の議論は、単に中国にのみ向けられるべきものではない。非宗教的で多元的・自由主義的な民主を日本で守ることの重要性についても考えさせてくれる一冊である。

（360頁、本体7,000円+税）

-
- 1 関智英「批評と紹介 ラナ・ミッター著『満州の神話：近代中国におけるナショナリズム・抵抗・協力』（『東洋学報』第86巻第4号、2005年）。またミッター・中嶋晋平訳「心のなかの満洲：1930-37年の中国東北部をめぐる出版とプロパガンダ」（玉野井麻利子編・山本武利監訳『満洲：交錯する歴史』藤原書店、2008年）もある。
 - 2 吉澤誠一郎『天津の近代：清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年）、4、6頁。
 - 3 代田智明『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミック』（三重大学出版会、2011年）、11頁。
 - 4 石井知章「太平楽論の体たらく：代田氏に反論する」（『中国研究月報』第65巻第7号、2011年）、代田智明「蝸壺のなかのまどろみ」（同前第66巻第5号、2012年）、同「もうひとつの近代化と文革評価」（同前第67巻第3号、2013年）などを参照。
 - 5 水羽信男『中国近代のリベラリズム』（東方書店、2007年）および同『中国の愛国と民主：章乃器とその時代』（汲古書院、2012年）
 - 6 本書ではホルヴァートとされ、本書に忠実にドイツ語原版ではなく英訳にもとづいている。拙稿は上田浩二ほか訳『ホルヴァート著作集 II（小説編）』（三修社、1987年）に掲載された「神なき青春」によった。
 - 7 竹内好個人訳『魯迅文集』第4巻（筑摩書房、1983年）332-333頁。
 - 8 この点については、伊藤富雄「ホルヴァートの小説『神なき青春』：反ファシズムと信仰のテーマを巡って」（『立命館言語文化研究』第4巻第6号、1993年）を参照されたい。